

日本語部門は、1年生全員の参加を義務づけ、クラスで予選を行い、クラス毎に原則2名を選出して本戦で競い合うという仕組みになっています。今年度は11名の学生が本戦に参加しました。国籍は、中国9名、インドネシア2名です。

例年のことですが、スピーチは「留学生の見た日本」という大きな枠組みのなか、それぞれの学生がタイトルをつけて発表することになっています。日本人のものの見方、考え方、そして住んでいる街の様子などは、私たち日本人にとってはあまりに慣れ親しんだものであり、ほとんど意識に上ることはないでしょう。それを、新鮮な目で見つめ、自分の育った文化、社会と比較して、感心したり、疑問に思ったり、納得がいかないと思ったりしたことなどを、素直に自分の言葉で表現して、今年も、さまざまな心に響くスピーチしてくれました。3位のトウヨウさんは「日本人の優しさは偽善か」というタイトルのもと、日本人の振る舞いについてのスピーチでした。聴く者をぐんぐん引き込む詩的な語り口は圧巻でした。2位のチョウライさんは、日中の挨拶の相違に端を発し、日本人と中国人のものの見方、考え方の違いを実に温かい目で見たとスピーチでした。そして、1位のアニサパダンペランギさんは、インドネシア人だからこそ感じる疑問を投げかけてくれました。私たちにとっては日常的な行為も、彼女の目から見れば不可思議な、納得のいかない行為だという主張は、聴く者に多くを考えさせたにちがいありません。